旧聞日本橋

長谷川時雨

三上於菟吉

序文

長谷川時雨（しぐれ）は、生粋（きっすい）の江戸ッ子ということが出来なければ、生抜（はえぬ）きの東京女だとは言えるであろう。彼女の明治初期の首都の中心日本橋油町（あぶらちょう）に法律家を父として生れて、最も東京風な家庭教育の下に育って来た女だ。彼女は寺小屋風が多分に遺（のこ）った小学校に学んだり、三味線、二絃琴（にげんきん）の師匠にも其処（そこ）で就いた。時雨は現在では、さまざまの思想と生活との推移から複雑な人になっているが、内心にはいつも過去の日本橋ッ子としての気魄（きはく）が残映して、微妙にその感情を操作して

いるように見える。

とにかく、この『旧聞日本橋』は、きわめて素直に、少女期以来彼女が見聞した、過ぎし日の現象に関する記録である。人文史的に見るも意義なしとせぬと思う。

昭和十年一月

三上於菟吉（みかみおときち）

自序

ここにまとめた『日本橋』は、『女人芸術』に載せた分だけで、その書きはじめには、こんなことが記してあります。

――事実談がはやるからの思いつきでもない。といって半自叙伝というものだとも思っていない。あまりに日本橋といえばいなせに、有福（ゆうふく）に、立派な伝統を語られている。が、ものには裏がある。私の知る日本橋区内住居者は――いわゆる江戸ッ児は、美化されて伝わったそんな小意気（こいき）なものでもなければ、

洗練された模範的都会人でもない。かなりみじめなプロレタリヤが多い。というよりも、ほろびゆく江戸の滓（かす）でそれがあったのかも知れない。私はただ忠実に、私の幼少な眼にうつった町の人を記して見るにすぎない。もとより、その生活の内部を知っているものではないし、面白くもなんともないかもしれないが、信実に生（いき）ていた一面で、決して作ったものではないというだけはいえる――

打明けていえば、『女人芸術』の頁数の都合で、いつも締切りすぎに短時間で書き、二枚五枚と工場へはこび、しかも編輯（へんしゅう）の都合で伸縮自在のうきめにあった

もので、そのために一層ありのままで文飾などありません。私の生れたうまや新道、または、小伝馬町（こでんまちょう）、大伝馬町（おおでんま）、馬喰町（ばくろ）、鞍掛橋（くらかけばし）、旅籠町（はたご）などは、旧江戸宿（しゅく）の伝馬（てんま）駅送に関係がある名です。文中にもある馬込（まごめ）氏は、江戸宿の里長馬込勘解由（かげゆ）の家柄で、徳川氏が江戸に来たとき、駄馬人夫を率いて迎えた名望家で、下平河の宝田村——現在の丸の内——から土地替に伝馬町へ移され名主となった由緒があるのです。大伝馬町の大丸の下男が、旅籠町となったのをかなしんで、町札をはがしたことも書きましたが、旅籠町とはずっと昔にも一度つけてあった町名で、旅籠とは、馬の食を盛

る籠（かご）、馬飼（うまかい）の籠から、旅人の食物を入れる器（うつわ）となり、やがて旅人の食事まかないとなり、客舎となり、駅つぎの伝馬旅舎として縁のふかい名であり、うまや新道の名も、厩（うまや）も、小伝馬町大牢（たいろう）の御用のようにばかり書きましたが、それも幼時の感じを申述（もうしの）べただけです。

伝馬町大牢は明治八年まで在存し、牢屋の原の各寺院は、明治十五年ごろから出来たことを、文中には書洩（かきもら）しましたからここに記入いたしおきます。

我見（がけん）『日本橋』は、まだもっと書きつづけるつもりでおりますが、この集には、近親のものが重に書かれたため、したがって挿入した写真など、親（しん）に厚ききら

いがありますが、これは当時の風俗を知るため、手許（てもと）にあって、年月に間違いのないものゆえに、私事を捨てて入れました。挿絵（さしえ）は天保（てんぽう）十四年に生れた故父渓石深造（けいせきしんぞう）が六歳のころから明治四年までの見聞を「実見画録」として百五十図書残しおいてくれましたなかから、すこしばかり選び入れました。装幀（そうてい）は烏丸光康卿（からすまみつやすきょう）『後撰集（ごせんしゅう）』表紙裏のうつし、見返しは朱が赤すぎましたが、古画中直垂紋（ひたたれもん）であります。

この書は書肆（しょし）の熱意にて、極めて速（すみやか）に出来、ふりがなを一度失いしためにあるいは校正の麁洩（そせつ）もあらんかとそれのみをおそれます。

昭和十年一月十四日

時雨

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店
1983（昭和58）年8月16日第1刷発行
2000（平成12）年8月17日第6刷発行
底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房
1935（昭和10）年刊行
入力：門田裕志
校正：小林繁雄
2003年5月17日作成
2006年11月13日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。